

東京外国語大学大学院  
ドイツ語学文学研究会  
DER KEIM Nr. 42 抜刷  
2019 年 3 月発行  
ISSN 0285-953X

哲学の挫折の物語：フィリップ・マインレンダーの  
『ルペルティーネ・デル・フィーノ』の新たな位置づけ

**Eine Geschichte des philosophischen Scheiterns:  
Philipp Mainländers „Rupertine del Fino“**

永盛 鷹司  
**Yoji NAGAMORI**

**DER KEIM**  
かいむ  
第 42 号

# 哲学の挫折の物語：フィリップ・マインレンダーの『ルペルティネ・デル・フィーノ』の新たな位置づけ

Eine Geschichte des philosophischen Scheiterns:

Philipp Mainländers „Rupertine del Fino“

永盛 鷹司

東京外国語大学大学院博士後期課程

Yoji NAGAMORI

Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

## Abstract

Philipp Mainländer (eigtl. Philipp Batz, 1841-1876) ist hauptsächlich als Philosoph bekannt, der die pessimistische Weltanschauung Arthur Schopenhauers kritisch übernommen hat. Deswegen hat man seinen literarischen Werken in der Forschung bisher nur wenig Bedeutung beigemessen. Seine einzige Novelle „Rupertine del Fino“ wurde ebenfalls als eine Kopie oder praktische Darstellung des Grundprinzips seiner Philosophie betrachtet.

Aber wenn man die Darstellungen der zwei Hauptfiguren dieser Novelle genauer analysiert, wird es klar, dass dieses Werk eine Geschichte des philosophischen Scheiterns ist. Obwohl die beiden Figuren versuchen, die Prinzipien der mainländerschen Philosophie zu verwirklichen und durchzusetzen, scheitern sie an den Hürden, an welchen man in der bürgerlichen Gesellschaft unabwendbar anstößt.

Diese neue Auslegung wird ein Ansatzpunkt, um die Entwicklung des mainländerschen Gedankens nachzuvollziehen und seine Gedanken und Werke nicht nur in den philosophiegeschichtlichen, sondern auch in literaturgeschichtlichen Kontext einzuordnen.

## 1. はじめに

本稿は、フィリップ・マインレンダーの小説『ルペルティーネ・デル・フィーノ』を、マインレンダーの哲学的著作との関連において分析し、新たな解釈・位置づけを提示するものである。フィリップ・マインレンダー (Philipp Mainländer, 本名: フィリップ・バッツ, Philipp Batz, 1841-1876) は、文学的著作も残しているが、従来はもっぱら、ショーペンハウアーの思想を継承したペシミズムの哲学者と見なされてきた。オッフェンバッハ・アム・マインの企業経営者の家庭に生まれたマインレンダーは、商人になる教育を受け、ドレスデンやイタリアで修業を積む傍ら文学に親しみ、詩や戯曲を創作する。1860年にはショーペンハウアー哲学と出会って衝撃を受け、以後文学作品の創作を続けながらも、哲学的思索に傾倒する。ショーペンハウアー哲学を批判的に継承したマインレンダーの哲学は、その主著である哲学書『救済の哲学』(„Philosophie der Erlösung“, 第一巻1876年, 第二巻1886年出版)へとまとめられた。1876年3月31日の夜から4月1日の未明の間、『救済の哲学』第一巻の刷り上がりを出版社から受け取ったマインレンダーは、もはや人生の目標はなくなったと表明し、自ら命を絶つ<sup>1</sup>。このような経緯により、マインレンダーの生前に公刊された著作はないが、いくつかの著作は死後20年ほどかけて順次公開された。その中でも主著とされる『救済の哲学』第一巻は当時、哲学者ニーチェ、芸術家アルフレート・クビーンから、政治家アウグスト・バーベルにまで広く受容された形跡がある。しかし20世紀にはいと急速に忘却され、「ディレクタント」<sup>2</sup>というニーチェによる否定的な評価と、自殺の擁護者というイメージ<sup>3</sup>のみが残った。20世紀末ごろから、かれの思想を再評価する動きがみられ、かれの哲学・文学両方の著作を収録した著作集<sup>4</sup>、ならびにモノグラフィーや研究論文も出されるようになる。その現在においても、ほとんどの場合、かれはいわゆる「ショーペンハウアー・シュレー(学派)」<sup>5</sup>の哲学者として扱われ、体系的に書かれた哲学書である『救済の哲学』(主に第一巻)のみが研究対象とされることが多い。しかし、物を書くというかれのライフワークの原点は哲学

<sup>1</sup> Vgl. Walter Rauschenberger: *Aus den letzten Lebensjahren Philipp Mainländers. Nach ungedruckten Briefen und Aufzeichnungen des Philosophen*. In: *Süddeutsche Monatshefte*. 9. Jahrg. 1911/12, S.131.

<sup>2</sup> Friedrich Nietzsche: *Die fröhliche Wissenschaft*. In: *Nietzsche Werke Kritische Gesamtausgabe*. 5. Abtl. 2. Band. Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. Berlin: Walter de Gruyter, 1973, S.283-284.

<sup>3</sup> 西尾幹二「ショーペンハウアーの思想と人間像」西尾幹二責任編集『世界の名著 続10 ショーペンハウアー 意志と表象としての世界』, 中央公論社, 1975年, 7-8頁参照。

ではなく文学的創作にあり、哲学的思索の道へ進んで以降もマインレンダーは文学作品を書き続けた。この点を重視し、マインレンダーを「第一に文学者であった」<sup>6</sup>ととらえる考え方もある。しかし、彼の著作者としての存在を、文学者か哲学者か、どちらか一方に分類してしまうことはできないし、かれの思想を、文学者としての側面／哲学者としての側面というように、切り分けて語ることもできない。そのため、かれの思想の全容を解明していくためには、これまでの研究ではほとんど顧みられることのなかったかれの文学作品にも、その哲学書と同じ度合いで光を当てる必要があるといえる。またそのように多角的にかれの思想を捉えることは、19世紀後半のドイツの思想状況をより深く知るための一助となる可能性を有している。

本稿で扱う『ルベルティーネ・デル・フィーノ』（1875年成立、公開は作者の死後、1899年）（以下、本文中で単に『ルベルティーネ』と表記する）を見ても、マインレンダーという作家が、哲学者／文学者のいずれかに分類できる存在ではないことが分かるだろう。この作品は、論理的・体系的に記述された哲学書や、哲学的概念の言葉を多用したエッセイとは異なり、キャラクターとプロットをもつフィクションの小説である。しかしながら、その中にはマインレンダーの哲学的思想、特にその形而上学と、それによって示された世界の中で実際にわれわれ人間がどのように生きるべきか、という実践的側面が多分に織り込まれており、作者の「根本原理を実践的に説明」<sup>7</sup>したものの、あるいはかれの「人生と哲学の総括」<sup>8</sup>であると、従来の研究の中でも評価されている。もっとも、従来の研究では、主に登場人物の人物像や性格描写から、『ルベルティーネ』の「哲学的」性格が論じられるに止まっていた。しかし、この作品が小

<sup>4</sup> Philipp Mainländer: *Schriften in vier Bänden*. hrsg. u. mit einem Vorwort v. Winfried H. Müller-Seyfarth, Hildesheim: Olms, 1996-1999.

この著作集の第一巻には『救済の哲学』第一巻、著作集第二巻には『救済の哲学』第二巻、第三巻には劇詩『最後のホーエンシュタウフェン』、第四巻には『ルベルティーネ』を含む他の文学テキストが所収されている。

本稿では、マインレンダーのテキストの引用をこの著作集から行う。引用の際は、ローマ数字で巻号、アラビア数字で頁数を、引用箇所直後に括弧内に記す。

<sup>5</sup> Thorsten Lerchner: *Mainländer-Reflexionen. Quellen — Kontext — Wirkung*. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2016. S.13.

<sup>6</sup> Joachim Hoell: *Die Lust auf das Nichts. Philipp Mainländers Novelle Rupertine del Fino*. In: Winfried H. Müller-Seyfarth (hrsg.): *Was Philipp Mainländer ausmacht. Offenbacher Mainländer-Symposium 2001*. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2002, S.73.

<sup>7</sup> Hoell: a. a. O., S.74.

<sup>8</sup> Guido Rademacher: *Der Zerfall der Welt. Philipp Mainländer. Kurz gelebt und lange vergessen. Vita und Werk eines Optimisten*. London: Turnshare 2008, S.213.

説として書かれている事実を考慮すれば、単に登場人物の性格をある哲学的思想の表明と見なすような解釈が妥当といえるのだろうか。つまり、その登場人物が物語世界の中でどのように振る舞うのか、物語全体の結末はどのようなになっているのかという、小説的語りの側面も分析対象とすべきではないのだろうか。本稿では、この点を掘り下げることによって、『ルベルティーネ』がマインレンダーの哲学を単に開示するに止まらないテキストであることを明らかにしたい。この作品は、マインレンダーの哲学を反映・体现した登場人物たちが、市民社会のなかで自らの生き方を実践しようと試み、それに挫折する物語なのである。このように『ルベルティーネ』を「哲学の挫折の物語」ととらえることは、今後のマインレンダー研究をより深めていくための出発点となると同時に、「ショーペンハウアー・シュレー」としてのみ扱われることが多かったマインレンダーを、新たに同時代の文学史、思想史のコンテクストに組み入れるためのきっかけにもなるだろう。

以下、まず初めに『ルベルティーネ』のあらすじを概観したあと、従来の研究においてこの作品がマインレンダー哲学の「総括」とみなされてきた根拠ともなっている、主要な登場人物の人物像・性格描写について、マインレンダーの哲学と照らし合わせながら確認する。それを踏まえうえて、本稿独自の議論として、この物語のなかでは登場人物たちが、その理想とする生き方（それはマインレンダーの哲学で理想とされている生き方でもある）を完遂できていないということを指摘する。その際、その失敗の根底には、市民社会における二つの問題が横たわっていることを合わせて明らかにする。最後に、この作品を「哲学の挫折の物語」としてとらえることの意義と、本稿の議論を出発点にした今後の研究の展望を述べる。

## 2. 「生への意志」の否定と肯定：マインレンダー哲学からみた『ルベルティーネ』における対立軸

『ルベルティーネ』をマインレンダーの哲学の「総括」もしくは「実践的に説明」したものだと位置づける従来の考察は、どのような根拠でなされているのか。ここではそれを、『ルベルティーネ』のあらすじとマインレンダーの哲学、そして従来の研究を概観することによって整理してみよう。

『ルベルティーネ』は、簡単にいえば男女の三角関係の物語である。物語の舞台は、マインレンダーが生きていた時代とおおよそ同時代のドイツ、「オーデンヴァルトの西の末端」(IV, 232)で始まる。題名主人公である女性ルベルティーネ・デル・フィーノは、画家オットー・フォン・デュースフェルトと婚約し

ていたが、オットーは一人旅に出たまま戻ってこない。ほどなくして、オットーは旅先で事故に遭い命を落としたという報せがもたらされる。オットーの死の報に接して生きる希望を失うルペルティーネをみて、彼女の従兄でありオットーの友人でもある哲学者ヴォルフガング・カレンナーは、ルペルティーネと結婚することで彼女を死から救おうと決意する。そのような経緯で結婚し、しばらくは落ち着いた夫婦生活を送っていたルペルティーネとヴォルフガングだが、ある日、オットーは長らく昏睡状態に陥り音信不通になっていただけで、実は生きていたということを知る。その後、次第に平板な生活に飽き始めたルペルティーネは、回復したオットーと偶然再会したのを機に、ヴォルフガングとの結婚生活を解消し、オットーのもとへ向かう。ルペルティーネとオットーはイタリアに渡り、そこで活き活きとした毎日を過ごす。しかしオットーの身体は病にむしばまれており、それが悪化すると同時に経済的困窮がかれらに襲いかかる。オットーは回復することなく死に、ただ一人、無一文となったルペルティーネはドイツのヴォルフガングのもとへ帰り、そのまま精神的にも肉体的にも衰弱して世を去る。

この作品の三人の主要な登場人物のなかで、マインレンダーの哲学からすればとりわけ重要なのは二人の男性、ヴォルフガング・カレンナーとオットー・フォン・デュースフェルトである。題名主人公であるはずの女性ルペルティーネ・デル・フィーノはむしろ、二人の間で気まぐれに揺れ動き、「自ら行動するというよりはふりまわされているのみ」<sup>9</sup>であり、自らの意思がないようにさえみえる。ルペルティーネのこの動きを、芸術と哲学の間を揺れ動いたマインレンダー自身と重ねたり、このような男女の描き方にジェンダー論的な批判を加えたりと、別の観点からもさまざまな論じ方が可能ではあるが、すでに述べた二つの重要な先行研究もこの二人の男性登場人物を軸に論じており、本稿はそれらを批判的に継承するものであるため、ここでもヴォルフガングとオットーという二人の男性登場人物を中心に論じていくことにする。

ヴォルフガングとオットーは、対極の性格を持つ存在、それぞれが理想とする生き方が正反対である存在として、非常に図式的に描写されている。さまざまな点において、かれらが正反対の存在であるということが作品中では繰り返し強調される。ヴォルフガングは哲学者であり、芸術とその愉悦は学問の頂点に至るまでの一つの段階に過ぎないと考えているのに対し<sup>10</sup>、芸術家のオット

<sup>9</sup> Hoell: a. a. O., S.74.

<sup>10</sup> Vgl. IV, 263.

ーは美そのものを追い求める。ヴォルフガングがもともと頑なな「独身主義者」(IV, 234)であったのに対し、オットーは「地上でもっとも美しいもの」を「若々しい少女の唇によるキスがもたらす幸福」(IV, 234)だと考え、ヴォルフガングの独身主義を批判する。ヴォルフガングはドイツの牧歌的な郊外の「静かで心地よい家」(IV, 258)に一人で満足して暮らしているのに対し、オットーはドイツにあるのはただ「忘れられた墓、黴臭い空気、亡霊」(IV, 238)のみだといい切り、「理想的なさまざまなフォルムの途切れることのないつながり、魅惑的な優美さ、調和した動き、うっとりするような色彩」(IV, 238)があるというイタリアにあこがれる。このように極端なほど図式化された二人の対照的な性格・生き方は、マインレンダーの哲学(『救済の哲学』)のなかで理想とされている、生に対する「二つの根本的態度」<sup>11</sup>がそのまま投影されていると指摘されてきた。これまでの研究において、この二人の関係性は、「生への意志の否定」(ヴォルフガング)対「生への意志の肯定」(オットー)<sup>12</sup>、あるいは「アポロンの」(ヴォルフガング)対「ディオニソスの」(オットー)<sup>13</sup>という言葉で表現されている。

マインレンダーの哲学的名著『救済の哲学』を参照すると、この見解は説得力をもつ。『救済の哲学』第一巻においてマインレンダーは、この世は苦痛のほうが大きいという主にショーペンハウアーから受け継いだペシミスティックな世界観に立脚し、万物の目標は「絶対的な無」(I, 358)、すなわち死であり、そこへ自覚的に至ることこそが人間にとっての救済にほかならないということを、あらゆる哲学的観点<sup>14</sup>から論証し、それらの議論を総合して一つの体系的なシステムにまとめあげた。一つの体系的システムを構築し提示した第一巻とは異なり、『救済の哲学』第二巻はむしろそのシステムを前提に個別の問題を論じた哲学的エッセイの集積であるが、ここで述べた根本的な世界観については両巻にわたって一貫している。人間がその究極的な目的(=救済)へと至るまでの実践的な生き方として、具体的な二つの態度がある。それは「生への意志(Wille zum Leben)の否定」と「生への意志の肯定」である(I, 345f.)。前者

<sup>11</sup> Hoell: a. a. O., S.75.

<sup>12</sup> Hoell: a. a. O., S.75.

<sup>13</sup> Rademacher: a. a. O., S.191. この用語はニーチェの『悲劇の誕生』を念頭に置いているが、このニーチェの概念をそのままマインレンダーのこの作品を論じるのに使用することが適切かどうかは議論に値する。

<sup>14</sup> 『救済の哲学』の第一巻は、認識能力の分析論、自然哲学、美学、倫理学、政治哲学、形而上学という順の本編と、同じ順番でショーペンハウアーとカントの哲学が検討される付録「カントとショーペンハウアーの哲学の批判」からなる。

は徹底した禁欲、後者は欲望に忠実に動くことだともいえる。この両者は一見、対極のあり方であるように、とりわけ「生への意志の肯定」はマインレンダー哲学が目指す目標とは正反対の方向に向かっているようにさえみえる。しかしマインレンダーによれば、両者は最終的には「対立するものではない」(I, 346)。両者に対照的な要素があるとしたら、それは向かっている方向ではなく、「その動き方」(I, 347)、つまりプロセスにある。たしかに、生への意志を否定するあり方のほうが、死こそが人間の救済であるという目標をあらかじめ見据えることができているという点においては、「その終わりが見えていない」(I, 346) 生への意志を肯定するあり方に比べ「より速い動き」(I, 347) にはなりうる。しかしながら、死は誰にも必ずやってくるものであり、その意味では生は死へと向かう手段と位置づけられるため (Vgl. I, 346f.), 最終的には「両者が目指しているものは同じであり、どちらも目指しているものに行き着く」(I, 347) という。

ここで本質的に重要なのは、その人が実際に生きているか死んでいるか、そして死ぬのが早いか遅いかではなく、その人自身によって「生きることに価値がないということが認識されること」(II, 504) であり、この点において、生への意志を否定するあり方＝「ベシミスト」は「死の準備ができている (reif)」者、反対に、生への意志を肯定するあり方＝「オプティミスト」は「まだ死ぬための準備をできていない (noch nicht reif)」者と定義される (I, 348f.)。生への意志を肯定する「オプティミスト」は「生きることに価値がないということ」をいつどのように認識できるのかということ、それは「すべての享楽が味わいつくされたときのみ可能」(II, 504) だという。すべての享楽を味わい尽くした先にあるのは「退屈」であり、それは困窮よりも苦しいものである (Vgl. I, 207)。そのときには、生きることの無価値さを否が応でも痛感することになる。このプロセスを通して、「オプティミスト」も「生きることに価値がないということ」を結局は認識することになるのである。このことから、生への意志を否定するあり方と肯定するあり方はどちらも結果的に同じであるが、だからといってどちらともつかない中庸な生き方をするという選択肢は存在しない。マインレンダーにとって、人間が救済されるための道は、生への意志を否定してまっすぐ目的へ向かうか、生への意志を肯定してあらゆる享楽を味わいつくすかのいずれかだからである<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> この点からも、マインレンダーが単純に自殺を推奨しているにとらえる見解や、死ぬことそのものが救いだと考えていたとする見解には疑問が呈される。



以上みてきたように、『ルペルティーネ』の二人の対照的な登場人物は、マインレンダーの哲学における「生に対する二つの根本的態度」とパラレルであることは疑いをいれない。しかしこのことのみをもって、この作品をマインレンダー哲学の単なる「要約」と結論づけるのは、いささか早急だろう。というのも、物語の進行や結末を分析すると、この二人の登場人物はともに、上述したような理想的な生き方を完遂できていないことがわかるからである。次章では本稿独自の議論として、『ルペルティーネ』という作品は、むしろ哲学の挫折の物語であるということを考察していく。

### 3. 挫折の物語：哲学的生き方と市民社会との摩擦

両極端に性格づけられ、マインレンダーの哲学において理想とされる二つの対照的な生き方を体現した登場人物として物語世界に投げ入れられたヴォルフガングとオットーであるが、『ルペルティーネ』のなかでは、この両者ともに、それぞれの性格に合った生き方、それぞれの理想としている生き方を貫徹することができない。両者はそれぞれ異なる理由で挫折を強いられるのだが、その理由に共通するのが、マインレンダーの哲学的な生き方とは相いれない、市民社会において避けることのできない二つの事柄である。まず、ヴォルフガングとオットーのそれぞれについて、その性格描写をより詳細に分析したあと、二人が作品のなかで何によって、どのように挫折を強いられるのかを、検討していくことにしよう。

#### 3.1. ヴォルフガングの挫折：市民社会的な人間関係の呪縛

ヴォルフガングが挫折するのは、市民社会的な人間関係、具体的には、結婚と家族関係によってである。ヴォルフガングが理想としており、物語の冒頭まで実行していた生き方は、結婚や家族という、市民社会的な人間関係から距離を取り、否定さえするものであった。しかし、オットーの死の報とそれによるルペルティーネの深い悲しみをきっかけとして、婚姻関係、家族・血縁関係という契機に否応なしに巻き込まれていく。その結果ヴォルフガングは、自らの道を中断せざるを得なくなるのである。

ヴォルフガングは、作者マインレンダーと同じように、ショーペンハウアーに強く影響を受けた哲学者として描かれている。

かれ〔ヴォルフガング〕は独創的で画期的ではなかったものの実践哲学者であった。かれはあらゆる著名な思想家たちの著作を徹底的に研究し、独自

の世界観を作り上げた。その主な素材を提供したのはショーペンハウアーの体系であった。(IV, 266)

ヴォルフガングがショーペンハウアー哲学のとりわけどの部分に影響を受けたのか、そしてかれが打ち立てた「独自の世界観」のディテールについては、作中には記されていない。しかし、「ショーペンハウアーの体系」と「実践哲学者 (ein praktischer Philosoph)」という言葉の組み合わせは、ショーペンハウアーの主著『意志と表象の世界』第四巻の冒頭部分を想起させる。

該当箇所ではショーペンハウアーは、これから自分が行う考察は「人間の行為にかかわる」<sup>16</sup> ものであると表明し、「いま述べた観点からすると、一般的な表現をするなら、これからわたしたちが行おうとする考察は実践哲学 (die praktische Philosophie) であり、これまで取り扱ってきた理論哲学と対照をなすものである」<sup>17</sup> と述べている。そしてその『意志と表象の世界』の第四巻とは、人間が実際に苦悩から（つまり「意志」への奉仕から）解放されるための道として、禁欲的な、生への意志の否定を説くものである。このことから、ヴォルフガングの思想とは、ショーペンハウアーが説くような生への意志の否定にきわめて近いものであることが推測される。ショーペンハウアーを継承したマインレンダーが説いた生への意志の否定も、とりわけ徹底した禁欲を説いている点でこれに対応するものである<sup>18</sup>。そしてヴォルフガングは、「実践哲学者」の名に恥じず、上述したような思想を自分の実生活において実践しようとしていたことがうかがえる。

かれ [ヴォルフガング] の世界観（それはおおよそのところベシミスティックな折衷主義であったのだが）がはっきりするやいなや、かれは自分に備わったすべての力でそれをとらえ、それをかれの人生における覆すことのできない原理とした。(IV, 266)

実際にヴォルフガングは、オットーが一人旅から戻らなくなる前までは、孤独で禁欲的で、瞑想的な生活を送っており、それに満足していた。ヴォルフガングの禁欲的な生活をからかいつつ、恋愛や結婚を遠回しに勧めるオットーに

<sup>16</sup> Arthur Schopenhauer: *Die Welt als Wille und Vorstellung I. Sämtliche Werke Band I.* Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1986, S.375.

<sup>17</sup> Schopenhauer: a. a. O., S.375.

<sup>18</sup> Vgl. Hoell, S.76f.

対して、ヴォルフガングは以下のように答える。

ぼくはしかし自分が定めた目標へと至るためには自由でなくてはならないんだよ。完全にね。おまけにぼくは短いつかの間の望みを抱くこと、つまりは自分が創造する憐れな存在の不安と苦悩をもってして結婚生活の喜びと快楽を得ることはしたくない。(IV, 234)

これはヴォルフガングの禁欲主義を直接的に示す言葉であり、結婚して子どもをもうけ、家庭を築くことに対する忌避感をはっきりと表している<sup>19</sup>。このように、この作品において物語が動き出す前にはたしかに、ヴォルフガングは生への意志の否定という生き方を体現していたといえるだろう。

しかし、オットーが旅先から帰らず、事故に遭って死んだという情報がもたらされると状況は一変し、ヴォルフガングはその生き方を変えることを強いられる。ルペルティーネが自殺をほのめかすと、ヴォルフガングはうろたえ、なんとかしてルペルティーネを死から救う方法がないか考える。そうして出した解決策は、ルペルティーネと自分が結婚するということであった。禁欲主義を自分の生き方だとしていた自分が結婚することは当然、ヴォルフガングにとって苦悩を伴う決断であり、それを思いついたときには「この考えがかれの存在の本質を傷つけたかのように、かれは身をすくませ、目を濁らせ、苦々しく唇をゆがめた」(IV, 245) ほどであった。ルペルティーネの父親（ヴォルフガングのおじに当たる）に結婚の承諾を得て、すべてが決まった際も、ヴォルフガングは『リア王』の中の「このような犠牲には、神々が自ら香を焚いてくださるのだ」(IV, 249) <sup>20</sup> という一節を自分に言い聞かせ、自らを奮い立たせる。

しかしなぜヴォルフガングは、自分の本質に背くような、かくも辛い「犠牲」を払わなければならなかったのか。そもそもなぜヴォルフガングは、「ルペルティーネは死んではいけないのだ」(IV, 245) と強く思ったのか。そしてなぜ彼女を救うための方策として彼女と結婚するという行動をとったのか。その理由は、ルペルティーネに対する単なる哀れみや同情からのみではない。ヴォルフガン

<sup>19</sup> このヴォルフガングの台詞は、生まれることは不幸でしかないの子どもを作ることは罪である、というアレクサンダー・フォン・フンボルトの主張が念頭にあるとラーデマッハーは指摘している。(Vgl. Rademacher, a. a. O., S.194f.) マインレンダーは自身の哲学においてベシムスティックな世界観を打ち立てる際、このフンボルトの主張を援用している。(Vgl. I, S.209f.)

<sup>20</sup> „Auf solche Opfer streu 'n Die Götter selbst den Weihrauch.“ 『リア王』では、第五幕第三場のリア王の台詞。

グの「犠牲」の決断はむしろ、家族関係・血縁関係という契機によってもたらされたものである。ヴォルフガングとルベルティーネが結婚することは、亡くなったヴォルフガングの母親のかねてからの願いであり、そのことはヴォルフガングも知っていた<sup>21</sup>。実際、ヴォルフガングに最終的な決断を促すのは、「母の肖像画」を見て、母にそうしろとはっきりといわれたような気がしたときであった（IV, 246）。

更に、ルベルティーネとの結婚は、彼女の父親、つまりヴォルフガングのおじをも救うことになるとの考えも、ヴォルフガングに結婚を決断させる要因となっている。作中、ルベルティーネと二人で暮らしている年老いた父親は、彼女を極端なほど溺愛する人物として描かれている。ヴォルフガングは、娘が自殺してしまったら叔父も死んでしまうだろうとの懸念から、ルベルティーネに結婚を申し込むのだが、その際にはっきりと「きみはいま、お父さんのために生きなきゃならないのだ」（IV, 247）と説く。

このように、恋愛からではなく、家族を救うための「犠牲」として行われた結婚であるが、ヴォルフガングはここからルベルティーネとともに、一度結んだ結婚という関係を維持しようと努力していくことになる。オットーが昏睡状態から回復し、すでにヴォルフガングと結婚してしまったルベルティーネに送った手紙に対し、ルベルティーネは、ヴォルフガングに対しての感情とオットーに対する感情はまったく異なるものであると返事をし、オットーに対してはまだ「永遠に二つの魂を結び合わせるような愛」（IV, 254）を感じているという。しかし一方で、自分とヴォルフガングには「打ち砕くことのできない思いやりの鎖」（IV, 255）がある上に、父親のこともあるので、自分はもうヴォルフガングと別れる気はないとも書いている（Vgl. IV, 255）。この決断を聞いたヴォルフガングは、「ではもう一度夫婦の契りを結ぼう。ほくがきみに誠実でいるように、きみも貞節でいるんだよ」（IV, 257）と妻に呼びかける。この瞬間、二人の関係性がわずかに一しかしヴォルフガングのもともとの生き方からしてみればさらに不本意な形で一変化したのがわかるだろう。この時点から、結婚という関係の維持が目的化し、ヴォルフガングはそのことに心を砕くようになる。ルベルティーネが生への愛着を再び取り戻し、単調な夫婦生活に飽きてきたのをみてとったヴォルフガングは、彼女を「瞑想的で、学問的な領域へと引き入れ

<sup>21</sup> このことは冒頭のオットーとの会話のなかでヴォルフガングの口から直接語られる。「ほくは後悔はしていないが、母の切なる望みを叶えるのを断念しなければならなかったことについて、心を痛めてはいる。母は、もしルベルティーネとほくが結ばれたということを知ったら、すっかり満たされて死んでいっただろうに」（IV, 234.）

る」<sup>22</sup>ために、彼女に生への意志の否定の哲学を講義する。しかしこれはもはや、ルペルティーネのためでもなければヴォルフガング自身の哲学的思索を深めるためでもない。単純に、夫婦関係を平穏な形で維持しようとするためのみである。

家族を救うための「犠牲」としてなされ、その後は関係性の維持が目的化したこの結婚の前途が暗いものであることは明らかだろう。そもそも、「身を焦がすような、暴力的でデモニッシュに激しい」(IV, 233) 情熱をもつルペルティーネは、その性格からして本来はオットーの側にいることがふさわしく<sup>23</sup>、すでに分析したようなヴォルフガングの性格とは相容れないものである。このような状況を、ルペルティーネと偶然再会したオットーは極めて適切に言い当てる。

きみは幸福ではない。でも同じようにヴォルフガングも幸福ではないはずだ。かれの性格になりきって考えると、きみのせいでとてつもない圧力がかれを取り囲んでいるに違いないと感じる。そうだ、感じるし、はつきりわかる。かれは、きみを妻として家に入れたときに、超人的な犠牲を払ったのだ。そのような犠牲は、もしほくが似たような状況にいたら、払うことなんてできなかっただろう。(IV, 274)

この言葉がきっかけとなり、ルペルティーネはヴォルフガングのもとを去ってオットーのもとへいくことを決める。結局ヴォルフガングは、家族関係や婚姻関係など、市民社会の制度的な人間関係にとらわれ、自分の理想とする生き方を中断させられてしまったのだといえる。ヴォルフガング自身は、「犠牲」を払うことによって消耗しただけであり<sup>24</sup>、かれの哲学になにかの進展があったわけではなかった。ルペルティーネが去ったあと、ヴォルフガングは物語中にほとんど登場しなくなる。こうしてかれの生き方の失敗のみが、読者には強く印象づけられることになる。

### 3.2. オットーの挫折：美の追求と市民社会の経済原理の隔たり

家族関係・婚姻関係という市民社会の制度的な人間関係に巻き込まれること

<sup>22</sup> Rademacher: a. a. O., S.204.

<sup>23</sup> Vgl. Rademacher: a. a. O., S. 192.

<sup>24</sup> 「かれ〔ヴォルフガング〕は奇妙なほど老けてしまった。髪の毛には全体に白い筋ができていて、こめかみは完全に白髪になっていた。そしてかれの長くて濃い髭も、そこかしこで心配によって白くなり輝いていた。(IV, 250f.)

によって、「静かで心地よい」(IV, 258), 「生への意志への否定」という自らの哲学的生き方を中断させられるヴォルフガングに対して、その対極に位置する「生への意志の肯定」者オットーは、ヴォルフガングとは異なる理由で、しかし同じように、市民社会の原理によって、その生き方の挫折を強いられる。それは、経済の問題である。生への意志を肯定して「すべての享楽」(II, 504)を味わいつくす生き方を追求したオットーだが、病に加え経済的困窮という現実的な障害により、道半ばで死んでしまうことになる。

オットーは、ヴォルフガングとは異なり、家族的な人間関係に巻き込まれる心配のない人間として描かれている。「古い貴族の、しかし貧しい」(IV, 235)家庭出身のオットーは、物語冒頭ですでにその家の「唯一の末裔」(IV, 235)であり、近い家族はすべて死んでいることが示されている(Vgl.IV, 236)。ベルリンでの兵役中にヴォルフガングと友人同士になったオットーは、夏の休暇でヴォルフガングの家を訪れた際にルベルティーネと恋に落ち、その街に定住して自分のアトリエを開いた(Vgl.IV, 236)。身よりもなく、地縁もないオットーは、家族関係や血縁関係からは自由であるという点で、独立した人間であるといえる。また、家族関係や血縁関係において独立しているというだけではなく、オットーは経済的にも独立していた。かれは、芸術家の仕事で生計を立てることができていたのだ。「かれの風景画は、南国の自然を素晴らしく浄化して表したものであったが、全員一致の喝采を得た」(IV, 236)と作中には記されている。また、「かれの絵はいつも高値で買い取りがついた」(IV, 288)という記述からもわかるように、オットーには芸術的才能があり、その作品の社会的評価もそれなりに高かった。オットー自身もこのことに自覚的であり、「十四日も集中して作業をすれば、一年間贅沢三昧をして暮らしていけるだけ儲けることができる」(IV, 288)と語っている。しかし、ルベルティーネとともにイタリアに渡ると、かれは自らの理想とする美を追求するあまり、すべての財産を使い果たしてしまうことになる。

そもそもオットーがドイツを嫌い、イタリア行きを熱望していたのは、以下に引用する彼の台詞から読み取れるように、理想的な芸術的環境を求めたからであった。

ここ[ドイツ]では目は鈍くなるが、あそこ[イタリア]では、理想的なさまざまなフォルムの途切れることのないつながり、魅惑的な優美さ、調和した動き、うっとりするような色彩に絶え間なく反応する(IV, 238)

イタリアに渡り、現地で実際に美しい芸術を目の前にした際にもオットーは、芸術作品を直接見て美を感じ取る重要性について力説する。かれは、美術史の学者たちの説明を聞くだけで、直接見ることなしにその芸術をわかった気になっている人たちを批判し、芸術の美を直接感じ取っている自分たちはかれらとは違うと強調する。

しかし「芸術作品の」すべてを記述したり語ったりすることはできない。自分で発見しなければならないのだ、とにかく見て、見て、見ることで。かれら「他の人間」は、プラトンの洞窟の人間のようにその場にとどまり、壁に映る影を過ぎゆくものそれ自体と考えている。しかし我々はこれに直接、そして光で満ち溢れた霊気へと目を向けているのだ。(IV, 287)

また、ルベルティーネの存在がオットーの創作活動への意欲を更にかきたてることになった。かれは当初からルベルティーネに対して「君とイタリア！それがあればほくは偉大なものを創り出すことができる」(IV, 238)と言っていたし、ルベルティーネが結婚したヴォルフガングの元を去るつもりはないと書き送った時には、彼女を失ったことによって自分の芸術への意志が失われてしまったと述べている。

君の手紙を受け取ってから、ほくは麻痺してしまった。ほくの才能は眠ってしまったのだ。ほくは芸術に対するすべての欲求を失ってしまった。(IV, 275)

以上のことから考えると、ルベルティーネとともにイタリアに行くという念願が叶ったオットーは、これまで以上に創作活動に精を出すことができ、またかれによる作品はもともと高値で売れるものであったのだから、より豊かになる可能性さえある。それなのに、物語内で実際には、オットーはイタリアでただ一つの商品も売ることがなかったのである。

しかし、オットーは決して怠けていたわけではなかった。むしろかれはイタリアでも一貫して芸術的活動を行い、美を追求し続けていた。イタリアとルベルティーネ、この二つによってたしかにオットーは、「偉大なもの」を創り出したのだ。しかしその作品は、もはや売買の対象となるものではなかった。オットーがイタリアで力を入れたのは、「タブロー・ヴィヴァン」<sup>25</sup>、つまり活人画の作成であった。



オットーは古物商の商品をまるごと買い取り、前時代のファッションの華麗な衣装を製作させた。かれは今や大理石やカンバスの上ではなく、生きている素材を使って創作していたのだ。かれはしばしば老若男女、多数のヴェネチア人たちの集団と一緒にかれの住まいの広くて天井の高い広間にやってきて、飽くことのない情熱をもって、従順な集団のなかで元帥のように立ち回り、その青い目を喜びと創作意欲に輝かせながら、着飾った聖者、騎士、元老院議員、貴婦人、兵士、ゴンドラの船頭にグループ分けをした。ルベルティーネは、そのすべての中心であった。(IV, 288)

こうした試みは何度も繰り返され、さまざまな情景を描く活人画がオットーによって作られていたことが作中にも描写されている (IV, 288)。絵や彫刻を作り出すことによって美を表現するということに飽き足らず、活人画によって自分たちが美しい絵画や彫刻の一部となること。このことは、愛する人であり創作意欲の源泉でもあったルベルティーネとともに、憧れていた美が支配する地イタリアに來たことで初めて実現することであった。純粋な美の追求という観点からするとオットーは、職業芸術家としてドイツで絵や彫刻を売って生計を立てていた時代よりも美的・芸術的には高いレベルに至っていることがわかる。

実際のところ、芸術こそが一他のもものではあり得なかつただろうー、二人 [オットーとルベルティーネ] がその中で呼吸しているところの元素であつたのだ。二人の四つの目は美という魔法のレンズを通してしか物を見ることはできず、かれらの四本の手は美と上品さの必然的な法則にしたがつて動き、物事を配列するほかにはなかつた。オットーとルベルティーネはまさにかれら自身が、肉体を与えられた美の法則に他ならなかつたのだ。(IV, 288)

写真や映画などの記録メディアが一般的でなかつた時代、活人画は当然、作られているその場限りで消えてしまう。しかしオットー自身が美の法則となり、活人画のように自分たちという生身の素材をもって表現するようになった今、純粋に美の追求という観点からみると、何か形の残るものを残しておく必要もなくなる。そのためオットーは、何も形になるものを作品として残すことはなかつた。

---

<sup>25</sup> Rademacher: a. a. O., S.210.



これらの素晴らしい集団について一つのスケッチもオットーは残さなかった。ルペルティーネがこのことを問いただすと、かれは自分の頭を指してこう言ったものだ。「それはここに全部入っている。消えることも壊れることもなく刻み込まれてね」(IV, 289)

市民社会においては、そのような形の「芸術」には何の市場価値もないことは明らかである。というよりも、市場に出す商品すらないのだから、金銭を得ることがないのは当然であろう。ここに、美の追求という生への意志を貫徹するオットーの生き方と、市民社会との間の隔たりが明らかになる。美の追求を徹底すればするほど、そして実際に美に近づけば近づくほど、市民社会の経済原理とは相容れない存在になっていくのである。

美の追求によって全財産を使い果たしたあとにやってくるのは、当然のことであるが、経済的困窮である。しかもかれらはそれに突然気づくのである。その上、マインレンダーはここに突然の病という要素を加え、オットーを物理的に働けなくすることによって、他のことをして日銭を稼ぐという抜け道をも断っている<sup>26</sup>。結局、経済的困窮と病から救われることなく、オットーはそのまま命を落としてしまう。

このオットーの物語の結末は、マインレンダーの哲学から考えると、明らかに挫折である。なぜなら、本稿第二章で見たように、生への意志を肯定する生き方の場合、「すべての享楽が味わいつくされたとき」に、「困窮よりも苦しい退屈」を感じることによって、生きていることの無意味さを実感することが、理想的な完成形であった。オットーはしかし、まだ退屈に至る前に、経済という市民社会の問題によって、困窮に足止めされたまま死んでしまった。その上、かれは生の無意味さを認識することではなく、「死の床においてもかれは生への欲求に満たされていた」<sup>27</sup>。このことから、オットーは、生への意志を肯定するという自らの生き方を市民社会の市場原理によって挫折させられたといえるだろう。

#### 4. 結び

以上見てきたように、ヴォルフガングとオットーを、マインレンダーの哲学

<sup>26</sup> しかしオットーとルペルティーネの二人にとっては、病よりも経済的困窮の方が重要な問題であった。「最初の冷たい風—病気はかれらにとってそうではなかった—は、日々の食事に困るほどの困窮によってかれらの幸福に吹き込んできた」(IV, 295.)

<sup>27</sup> Hoell: a. a. O., S.76.

における二つの理想的な生き方—生への意志の否定と生への意志の肯定—の体现者だと考えると、『ルペルティーネ』の中ではその両者ともに、市民社会に生きる上では避けられない要素によって、挫折を強いられているということがわかる。生への意志の否定者ヴォルフガングは家族関係や血縁関係という要素によってその生き方を中断させられ、生への意志の肯定者オットーは経済という要素によって、その生き方を道半ばで終えなくてはならなくなった。『ルペルティーネ』という作品は、単にマインレンダーの哲学が登場人物に反映されているだけではなく、その哲学を市民社会で実践した際に突き当たる障害や問題点を浮き彫りにする物語であると結論づけられる。

最後に、『ルペルティーネ』を本稿のように「哲学の挫折の物語」として読み解くことは、今後のマインレンダー研究においてどのような意義をもつかということ述べて、本稿の結びとしたい。本稿で得られた結論は、以下の二つの点について、今後の研究を前進させる手がかりとなる。

一つ目は、『ルペルティーネ』の形式とマインレンダーの文学論の関係である。本稿では、作品の内容を中心に論じたため、立ち入る余裕がなかったが、『ルペルティーネ』の形式は、マインレンダーの文学作品の中で唯一の、同時代を舞台にした散文小説（作者によるジャンル表記はノヴェレ）である。ノヴェレは、マインレンダーが活動した当時のドイツの文学において、一大潮流であったリアリズムの作家たちに特に好まれたジャンルであった<sup>28</sup>。『ルペルティーネ』にもまた、リアリズムの影響を受けたと考えられる要素が多数織り込まれていることが指摘されている<sup>29</sup>。それまで同時代的なノヴェレを書くことがなかったマインレンダーが、自身の哲学の挫折の物語を書く際に、なぜこの形式を採用したのか、あるいはその逆に、同時代的なノヴェレを書こうとしたときに、なぜ自身の哲学の市民社会の中での挫折というテーマを扱うことにしたのか、このことは、マインレンダーの哲学の中の文学論や美学論との関係において検討すべき問題であろう。

二つ目は、マインレンダーの『救済の哲学』第二巻に、「社会主義」<sup>30</sup> という名のもとではっきりと示されている社会変革の思想と『ルペルティーネ』との関連である。『救済の哲学』第二巻においてマインレンダーは、第一巻では踏み込んで論じなかった同時代ドイツ社会の具体的な変革について論じている。そ

<sup>28</sup> Vgl. Rademacher: a. a. O., S.188f.

<sup>29</sup> Vgl. Rademacher: a. a. O., S.189, 205.

<sup>30</sup> 『救済の哲学』の第二巻は、「12の哲学的エッセイ」という副題がつけられ、その中の8番目、9番目、10番目のエッセイは「社会主義」(Der Sozialismus)としてまとめられている。

の社会変革の思想は、マインレンダー本人によれば「社会主義」であるのだが、その主要な要素は二つある。それは「共産主義」という名の、国家による貧富の差の解消、ならびにそれに伴う個人の困窮の撲滅と、「自由恋愛」に基づく、婚姻制度と家族制度の完全な解体である<sup>31</sup>。これはまさに、本稿で指摘した『ルペルティーネ』におけるマインレンダーの哲学と市民社会との相容れない二つの点とパラレルなのだ。このことから、マインレンダーは『ルペルティーネ』という小説の中で、自身の哲学を市民社会の中で実行するとどのような問題になるかをシミュレーションし、それを『救済の哲学』第二巻の社会変革の思想に練り上げたのではないかという仮説も立てられる。もっとも、この仮説を論証するには、『救済の哲学』第二巻の思想のどこまでがどのタイミングで成立したかということを今後明らかにしなければならない。『ルペルティーネ』の成立時期は1875年の11月から12月であり、それは『救済の哲学』第一巻の完成から第二巻の執筆開始の間の時期である<sup>32</sup>ことは明らかになっているものの、『救済の哲学』の構想自体がいつから練られていたのか具体的には定かではないし、『ルペルティーネ』の成立期間や経緯にしても、作者自身の発言のみから断定することはできない<sup>33</sup>。マインレンダーの諸著作の成立や発展のプロセスについては今後、文献学的な調査とともに検討するべきである。

いずれにしても、『ルペルティーネ』を、マインレンダーの哲学の市民社会の中での挫折の物語ととらえることは、これまでほとんど「ショーペンハウアー・シュレー」の哲学者という枠組みでのみ研究されてきたマインレンダーの思想・人物像を、新たな視点から考察するための出発点となりうるだろう。哲学者マインレンダー、文学者マインレンダーといういずれかの側面のみを見るのではなく、相互の関連を見ることで、かれの思想の全体像をその発展プロセスを含めて明らかにすることが必要である。その意味において、『ルペルティーネ』という作品は一つの重要な鍵となるといえる。

<sup>31</sup> 『救済の哲学』第二巻の第8エッセイを参照。(Vgl. II, 277-338.)

<sup>32</sup> Vgl. Rauschenberger: a. a. O., S.126f., Vgl. Hoell: a. a. O., S.75. ちなみに『ルペルティーネ』が新聞上に公開されたのは、マインレンダーの死後23年経った1899年4月のことである。

<sup>33</sup> マインレンダー本人は、マインレンダーの姉ミナがかれに「わたし [マインレンダー] にノヴェレを書くのは無理だろうと主張したから」というそれだけの理由で、「10日間で」この作品を書いたと記している。(Rauschenberger: a. a. O., S.130.)

しかし作者自身がこのように述べているからという理由だけで、全面的にこの記述を受け入れることはできないだろう。記述にどれほど信憑性があるのかどうかは検討に値する。